

## 【コメント】

西槇 偉 NISHIMAKI Isamu

熊本大学文学部

鄭寧先生は日本陶芸の研究者、広くいえば日本研究者となりますが、私は鄭先生<sup>の</sup>先輩にあたる、中国の日本研究者豊子愷<sup>ほうしがい</sup>（1898-1975）を研究しております。豊子愷は日本研究のほか、西洋美術や音楽の知識普及にも尽力し、1920 から 30 年代の中国で影響力がありました。自分の研究を踏まえながら、コメント、質問をさせていただきます。

豊子愷は西洋美術を習いに、1921 年日本留学をします。彼は一年未満の留学を終えて帰国しますが、洋画家にはなりません。竹久夢二風な漫画を描き、一世を風靡しますが、美術評論家、文学者としても多くの業績を残しました。拙著『中国文人画家の近代——豊子愷の西洋美術受容と日本』（2005）で、私は彼を伝統文人の末裔ととらえました。つまり、文学を重んじ、絵画を描くが、手仕事となる工芸にはあまり携わらないタイプの芸術家です。ところが、この研究会に参加することがきっかけになり、豊子愷と工芸の関わりにも注目する必要があるのではないかと考えるようになりました。

一つに、彼はブック・デザインをいろいろ手がけたことが挙げられます。それから、彼は中国工芸の改良を唱え、その中で日本工芸についても言及し、日常生活では日本の工芸品を愛用したこともあり、留学中に玩具を製造する工場を見学したこともあるようです。さらに、彼が生まれ育った家は染物屋だったということもあり、工芸は彼の身近にありました。文筆家、画家となっても、彼は染物工房を経済支援していたようです。

私がここで注目したのは、彼の日本工芸に対する批評です。「日本のあらゆるものに風趣が感じられ、ものの作りにも精神が暗に表出されている。その風趣と精神はともに日本のものとはいえ、つまりおおらかさはあまりなく、軽薄だとしても、それには系統だったものがあり、私の心を落ち着かせる」（豊子愷「工芸実用品与美感」『一般』第 1 卷 12 月号、1926 年 12 月。ここでは豊陳宝、豊一吟、豊元草編『豊子愷文集』芸術卷一、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、1990 年 9 月による。54 頁）、と彼は日本工芸に対して趣きがあり、精神も込められているが、大らかさはなく、多少軽薄だと評しています。この批評は、先ほど関先生のお話の中で、韓国から見れば日本の工芸品は完璧に仕上げられすぎているゆえに、あまり評価できないという韓国からの批評に通じるような気がします。ここに、東アジアの美意識の差異、葛藤が見え隠れして、多くの先生方に議論に参加していただきたいのですが、まず鄭先生にお聞きしたいと思います。

豊子愷の見方は 80 年前のもですが、今日どう変わったのでしょうか。ご自身の日本陶芸研究の見地から、日本工芸についての感想を聞かせてください。また、ご自分の作品の中に、日本陶芸を参考にしているものがあるとしたら、それはどのようなところでしょうか。そうして作られた作品は社会からどのように批評されるのでしょうか。